

浮世絵師たちの見た千住

行き交う人馬に豊かな河川、平地ならではの広々とした眺望を誇り、まさに「絵になる風景」だった千住。第一の宿場としての周囲の賑わいもさることながら、田園風景の広がる風光明媚な景観は江戸の人々の小旅行地として好まれ、江戸名所の一つとして多くの浮世絵に描かれました。特に隅田川沿いの閑静な行楽地として知られた関屋の里は、葛飾北斎、二代歌川広重らによって数々描かれています。そこには必ず特徴的な松が描かれ、関屋の里が松の名勝地だったことも伝えてくれます。



▲ 葛飾北斎《富嶽三十六景》 左「武州千住」 右「隅田川関屋の里」 天保2～4（1837～1839）年頃

千住は、北斎の代表作《富嶽三十六景》の一つの舞台ともなりました。「武州千住」は千住桜木二丁目付近の水門越しの富士を、「隅田川関屋の里」は、氷川神社に近い墨堤通りを舞台にしています。



歌川広重
《名所江戸百景 綾瀬川鐘が淵》
文久4（1857）年頃



二代歌川広重
《三十六歌撰 東京綾瀬川合歓》
明治2年（1866）年頃



二代歌川広重
《江戸名勝図会 関屋の里》
文久3（1863）年頃